

町史のひとこま

(第四回)

謎めいた

杉興運の最期

かこまれ、ときの声を聞きながら、部下の介錯(かいしやく)で切腹して果てた。これが九月一日のことである。

杉興運は、陶方にはつかず、あくまで主君大内義隆と運命を共にしたのだが、その最期については、どういうわけか三つの説があつて謎を残している。

【大内義隆記の説】大内義隆の寵臣相良武任(さがら・たけとう)は陶氏に恨まれていたが杉興運は相良を保護して北九州の花尾城に籠らせていた。陶の軍勢は花尾城を襲つて相良の首をとり、次いで高鳥居城に籠る杉興運のもとに殺到した。「杉興運の最期」として記されている。

【陰徳太平記の説】陶の討手は高鳥居城に迫る。杉豊後守太宰権少貳興運(「運」を「連」として)とその子彈正忠(だんじょうのちゆう)隆景は、若杉山に籠り、あくまで抵抗して死のうという気構えであった。しかし、地元の武士たちは心がわりして陶に逆らう気はなく、杉親子はやむなく若杉山を落ちのび、津屋村まで来て討たれたのであった。最期の場所は粕屋郡の津屋村(多々良川の下流)であり、九月九日のこととする。

【中国治乱記の説】これは前の二説とは全く違う。大内義隆は、九月一日、大寧寺で腹を切つて死んだが、その時、共に腹を切つた殉死者の中に、杉豊後守兼太宰少貳興運の名をあげて

筑前は、戦国大名として知られる大内氏の領地のひとつである。大内氏の筑前守護代として、大内氏から分れた重臣杉氏が、代々領国経営にあたつてきたが、杉豊後守興運(ぶんごのかみ・おきゆき)は、大内義隆の時の筑前守護代だった人である。

大内義隆は、武将というだけでなく文人としても知られ、山口を小京都に作りあげたのが義隆で、宣教師ザビエルにキリスト教布教を許したことも有名である。

陶の反乱軍が山口の町を襲つたのは、天文二十年(一五五二)八月二十九日。栄華を誇つた山口の町は火をかけられ、わずかな一行と共に日本海側の大寧寺まで逃れた義隆も、周囲を敵に

大内氏は大名の中でも、中国九州に七カ国に及ぶという広大な領地をもつ殊に有力な大名であった。義隆の代に重臣陶晴賢(すえ・はるかた)の反乱が起き、義隆は殺されて大内氏は滅亡する。そして毛利氏がさらに陶氏を打ち、中国地方を支配す

工次郎 豊後守 杉興運 像

大内義隆 像



大内義隆画像

いづれにせよ、大内義隆の有力な家臣たちが、陶晴賢になびいたのにくらべ、杉興運はあくまで主君の側に立つて死を選んだ。大内義隆の死も、杉興運の死も、共に悲劇的であった。

(町誌編集委員会事務局 石瀧 豊美)